

令和4年度 京都府立与謝の海支援学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）実施段階

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点目標（短期目標）
<p>◇一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育課程づくりを進める。（12年間を見通しながら）</p> <p>◇自立と社会参加する力を育てるために、基礎学力の充実に努めるとともに進路指導の充実を図り、希望進路の実現を目指す。</p> <p>◇安心・安全な学校環境の整備を行う。</p> <p>◇地域における特別支援教育のセンター的役割の推進に努めるとともに、医療、福祉、労働等の関係機関、家庭及び地域社会との連携を行う。</p> <p>◇専門性の向上に向けて研修を充実させ、指導内容や指導方法の工夫改善を行う。</p> <p>◇教育財産の継承に努め、「与謝の海の教育」の発展・向上を図る。</p>	<p>○12年間を見通した系統性のある教育課程の編成と実施を目指し、教務部・研究部を中心として全校的な実践や研究を行うとともに、各学部等において主体性を育成する授業改善の取組を進めることができた。</p> <p>○個別の指導計画を保護者と共有して指導につなげるなど、有効に活用することができた。今後内容の充実を図り、さらに活用を進めたい。</p> <p>○組織的なきめ細かな進路指導が定着しており、希望進路の実現が達成できた。今後キャリア教育の視点をさらに深めていきたい。</p> <p>○避難訓練の実施方法を改善することができたが、防災教育を充実させることが課題である。</p> <p>○地域のニーズに応え、地域として切れ目のない継続した支援が行える基盤を作る取組を推進することができた。</p> <p>○校外における研修の機会は限定的であったが、研究部を中心に全校的に過去3年間の研究のまとめを行うことにより、児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりについて研究と実践を深めることができた。</p> <p>○各部長がマネジメント能力を発揮して組織運営を円滑に行うことができたが、さらなる効率的な学校運営を目指すことが求められる。</p> <p>○ホームページ等を活用した広報活動を含め発信方法の充実を引き続き検討する必要がある。</p> <p>○リモート環境を利用して職員朝礼の簡素化や職員会議の短縮を進めたが、さらなる業務改善を図る必要がある。</p> <p>○コンプライアンスに係る調査や研修等を実施することにより、教職員の意識の向上を図った。今後も継続して取り組む必要がある。</p>	<p>◆12年間の系統性を踏まえ、児童生徒の能力や可能性を最大限を引き出し自立と社会参加する力を育てる教育課程の編成と実施を組織的に行う。</p> <p>◆よりよい評価の在り方を検討するとともに、個別の指導計画の活用をさらに進める。</p> <p>◆子どもたちが地域で生きていく力を育むため、関係機関と連携するとともに、地域の資源を生かした連携について研究と実践を進める。</p> <p>◆本校が継続して取り組んできた進路指導を更に充実発展させ、一人一人の希望進路の実現を目指す。</p> <p>◆校内の防災対策や安全・防災教育を中長期的視野に立ってさらに具体的に進める。</p> <p>◆関係機関との連携を密にして、地域のセンター的機能をさらに発揮し、就学前から社会参加までの切れ目のない継続した支援をさらに充実させる。</p> <p>◆多様な障害に対応する学習環境づくりのために、教職員の専門性や資質を高める取組を組織的に進める。</p> <p>◆各部長のマネジメントのもと、効率的な学校運営を目指すとともに、コロナ後を見据えて授業や行事等、教育活動全般のさらなる改善を図る。</p> <p>◆ホームページ等や関係機関との連携を通して積極的に広報活動を行い、本校の教育活動が伝わるように工夫をすることで効果的な発信に努める。</p> <p>◆働き方改革に係る、業務の改善を図る。</p> <p>◆コンプライアンスに係る意識を高め、府民の信頼を得られるように努める。</p>

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
小学部	一人一人のニーズや発達段階、障害等に応じた学習や支援の充実、授業改善を進めるとともに、教育課程の検証・改善を図る。	生活年齢や発達段階、12年間の系統性を視점에学習内容を整理し、授業実践を通してより一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程づくりを行う。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 生活年齢や長期的な姿を意識した学習内容を考えたり、「学びの履歴」を活用して学習状況の把握に努めたりするなど、個々の系統的な学びに向けて検討が進んだ。今後も12年間の系統性のある学習内容、授業実践を考える。 授業反省、評価等を生かし適宜指導計画の見直しや学習計画・授業改善に努めた。 ICTは1学期の活用方法に加え、学習や生活の場面で活用することが増え、児童にとってより身近な道具となってきている。家庭での活用を今後広げていきたい。 学習発表会では高学年が地域に伝わるお話を基に劇化して発表できた。また、学部研推を中心に地域とつながり合うことの意義を話し合いながら生活年齢や発達段階別の単元づくりに取り組んだ。地域と双方向のつながりをもった授業づくりについても検討していく。 教材交流や他学級の実践交流を通して学び合ったり他機関から案内されたリモート研修へ多数参加したりするなど、互いに研鑽することができた。今後も専門性の向上を目指していく。
		適切なアセスメントと各教科等のねらいを踏まえた個別の指導計画を作成するとともに、評価を通して教育課程の改善や授業改善を図る。	B		
		日々の授業反省を通じた授業改善を行うとともに、ICTを効果的に活用した授業作りや、地域とつながりあう授業づくりなど、児童にとって意欲が高まる授業作りを行う。	A		
		発達、障害、指導方法等、専門性の向上を目指した研修と学び合いを充実させる。	B		
	児童を中心に据えて指導者間、保護者、地域、関係機関との連携・協力を図る。	指導者間で連携し、からだづくり、基本的な生活習慣や挨拶、ルールやマナーを守る、コミュニケーションの土台となる力の確立など、学校生活全般を通して共通意識をもって指導する。	B	B	
		自立活動専任指導者と日常的に連携し、児童の実態や課題を適切にとらえ、個別の指導計画の作成や障害特性に応じた支援の在り方、評価の検討等を行う。	B		
		家庭との日常的な連携を大切にし、支援にあたる。	B		
		地域や関係機関等多様な人とつながり豊かな生活につながる連携を行う。	B		
	組織的、計画的に業務を遂行する。	年間、学期、月を見通した計画に基づき、計画的な授業実践を行う。	A	A	
		個々の業務分担を明確にするとともに、組織的、計画的、協働的に業務を進め、業務分担の偏りを防ぐ。	B		
		会議、時間、文書、環境等の精選を行う。	A		

						<ul style="list-style-type: none"> 学級経営計画、各学期のまとめ等の様式を変えたことで各学級間の共有がしやすくなったと共に業務負担の軽減につながった。 各分担に沿って業務を担いつつ臨機応変に協働しながら業務を進めた。しかし、一部業務分担の偏りがあり改善には至らなかった部分がある。任務の重なりや偏りをさらに見直す。 日常的な情報共有や議題整理、資料の事前配布等で会議時間の短縮に努めた。会議設定の精選、環境整備等も教務を中心に進めることができた。
中学部	個々の障害に視点をあて、キャリア教育の視点を持ち、系統性のある教育課程作りを行うとともに、主体性、思考力を育む授業作りを進める。	生徒が「分かる、学びがい」を実感し、中学部の時期につけたい力をもとに「主体性、思考力」を育む学習を進める。(ICT機器を効果的に活用)	A	B	<ul style="list-style-type: none"> 学習目標の達成を目指し、学習意欲や手立てにおいて、タブレット端末を実態に応じて効果的に活用した学習が進んだ。今後、活用の幅を広げたり、教員の研修を設定したりしたい。 地域の人材を活用して、作業学習のフィールドワークを実施し、生徒たちの興味関心や意欲を高めることができた。今後も地域とつながる学習を通して、相互の学びを深めたい。 学校間交流は、リモートで年2回実施した。両校のリーダー生徒が中心となって進め、学習発表やグループ活動で、互いにやりとりを楽しみながら交流することができた。 集団活動では、代表者会が中心になり、各取組を成功させた。その中で、個々の生徒も他者に意識を向けたり、役割を果たしたりしながら、学部、学年集団のまとまりができた。 個別の指導計画は保護者と懇談して作成、実施した。学習目標や内容、系統性をよく検討し、アセスメントをもとに今後も丁寧に連携する。 保護者とは、連絡帳や電話で必要な連絡を丁寧にいった。学級だよりでも様子を伝えた。 自立活動の指導では、保護者と課題を共有した内容を取り入れて実践した。 校内の関係部署とは、個々の学習課題や日常生活の指導について、継続的に、またタイムリーに連携することができた。 市町の福祉行政と連携し、生徒が安定して学校生活を送れるように努めることができた。今後も定期的な連携を進めていく。 生徒指導や進路指導において、部を中心に担任と方針を立てて指導を進めた。今後も組織的で効果的な指導を進めていく。 会議議題の整理や提案資料は共有フォルダで事前に確認できるなどとして、時間内に会議は終了し、業務量の縮減も進んだ。 	
		地域資源を活用・題材にした学習、様々な人とつながる学習、交流等の学習内容を工夫、検討しながら実践を進める。	A			
		集団活動が組織的にできるようにし、集団と個の育ちを大切に、自信や自己肯定感を育てる取組を進める。	B			
		アセスメントに基づく個別の指導計画の目標を保護者と共有するとともに、指導と評価の一体化を進める。	B			
	保護者や関係機関との連携を密にし、より適切な支援を進める。	保護者と課題を共有して指導を進めるとともに、学習の様子が家庭に届く発信に努める。	B	B		
	働き方を考え、組織的で効率的な学部運営を進める。	校内の各分掌、自立活動、寄宿舎、養護教諭等、組織的な連携を図り、生徒の実態について共通理解のもと、障害特性に応じた指導・支援を充実させる。	B			
		関係機関と連携、情報を共有し、共同した対応を行う(教育機関、福祉行政、医療、放課後等支援事業所など)。	B			
	働き方を考え、組織的で効率的な学部運営を進める。	組織的な学部運営と対応を行い、スムーズな運営と組織力の向上を図る。	A	A		
		学部の提案事項は計画的に、資料は事前配布、各会議等は効率よく設定する。	A			
		仕事量の平準化、相互に協力し合い、	B			

		健康で充実した働き方の工夫や配慮を行う。				<ul style="list-style-type: none"> ・教員間で気軽に周囲に相談できる雰囲気があり、協力的に仕事ができている。今後、より働きがいにつながる仕事の在り方についても考え合っていきたい。
高等部	発達段階や障害等一人一人の教育的ニーズを把握し、卒業後に生きる力を育む視点を大切にしたい授業づくりを進めるとともに、教育課程の検証、改善を図る。	学習指導要領の改訂や社会の変化を踏まえた「そだてる」視点、12年間の系統性や教科等横断的な「つながる」視点、生徒自身が自分の成長を振り返る「わかる」視点をもちつつ、教育課程を編成、実施する。また、学習評価を基に単元計画や適切な授業時数等について検討し、改善・充実を図る。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教科等横断的なつながりを大切にしたり単元配列表を参考にしたりして、系統性のある授業づくりを進めた。新たに理科・社会の単元配列表について、学習指導要領に基づき研究部を中心に検討、作成を進めた。ねらい達成に向け、必要時間数や12年間の学びのつながり等については引き続き検討が必要である。 ・成人年齢引き下げや防災教育等に関する学習について、教育課程上の位置づけや学習集団等について検討し、実施することができた。 ・本校らしい内容を検討し、全生徒にキャリアパスポートを作成することができた。生徒が自己の成長を振り返ることができるより良い活用方法について今後検討を進める。 ・研究部を中心に研修を重ね、生活単元学習や作業学習を中心に地域とつながる授業づくりを進めた。販売会や校内実習等をおおして地域の方とつながり、力を高めるとともに生徒のもつ力を発信することができた。 ・タブレット端末の持ち帰りによる家庭学習や端末で作成した資料による発表、欠席生徒とのリモート授業など効果的な活用が進んだ。障害特性に応じた活用については指導者の更なるスキルアップが必要である。 ・コロナ禍でもできることを考え、交流会や部活動の取組を生徒指導部が中心となって進めた。集団活動を通して生徒の主体性やリーダー性を高めたが、活動を振り返り学びを深める時間確保が課題である。 ・学校内外において互いに連携し合ったり学級内で指導方針を話し合ったりして、様々な課題を抱える生徒への対応を行った。学部外の教職員との連携についても、意識を更に高くもち進めていく必要がある。 ・自立活動部やコーディネーターと連携したり研修を重ねたりして、生活や学習に困難さを抱える生徒のアセスメントをていねいに行い、指導を進めることができた。 ・コロナ禍で変更も多い中、進路専任と担任が連携し、実習等をスムーズに実施し、多様な実態のある生徒の希望進路実現につなげた。 	
		地域との協働をおおして様々な人とつながり、地域で生きる力を育む授業づくりについて進めるとともに生徒の力を地域に発信する。	A			
		授業等におけるICT機器の効果的な活用について研修を深めるとともに、校内外におけるタブレット端末の活用を一層進める。	A			
		自治活動や交流会等、学校生活の充実や向上につながる取組を進め、集団の一員としての自覚を高め、自分で考え行動する主体性やリーダー性の育成を図る。	A			
		適切なアセスメントと各教科等のねらいを踏まえた個別の指導計画を作成し、一人一人の教育的ニーズに応じた妥当性・信頼性のある指導の充実を図る。	B			
	指導者間や保護者、関係機関等との丁寧な連携を図り、卒業後の社会生活に向けた指導や支援の充実を図る。	生徒の成長や変化への気付きを大切に、保護者と丁寧に連携するとともに、ケース会議等をおおして関係機関との連携を密にし、卒業後の社会生活に向けた支援をさらに充実させる。	B	B		
		学部内外の指導者間の連携を密にし、課題や指導方針について共通理解を図り、適切な指導や支援を進める。	B			
		自立活動部や外部の専門家と連携したり研修の機会を設けたりして専門性を高め、多様な実態を踏まえた一人一人に応じた指導・支援の充実を図る。	B			
	希望進路の実現と定着支援の充実を図る。	社会の変化や地域の実情を踏まえた進路指導の充実を図るとともに関係機関との連携を密にし、多様な実態に応じた希望進路の実現を目指す。	A	B		

		関係機関と連携を深め、実習、就労先につながる職場・職域開拓に努める。	B					<ul style="list-style-type: none"> 各学級や各課程で進路に対する目標を立て、卒業後を見据えた指導への意識を高くもって進路学習を進めた。生徒の意識向上につながる日常的な指導を続ける必要がある。 社会の変化や生徒の卒業後の就労継続に向けて進路学習、情報共有、アフターケアの在り方について検討が必要である。 学級や学部内において互いに言葉を掛け合い助け合って仕事を進めることができた。高等部内の業務を整理したり見えにくい業務を学部会で共有したりして工夫を重ねたが、更なる可視化による業務の平準化が必要である。 昨年度の実践検討を踏まえ、年間計画の見直しを進めたが、振り返り時間の確保に向けて等、課題の改善に向けては、更なる精選が必要である。 課程長を中心とした課程別運営や部長を中心とした専門部別運営の充実、また、学級長を中心とした効率的な学級運営、教務部提案の計画表等により効率よく仕事を進めることができた。次年度担当のスムーズな業務に向けた資料整理等を今後も進める必要がある。
	学部運営の効率化を図る。	昨年度の検討課題を踏まえ、学部組織の可視化による業務量の偏りを防ぐとともに、会議設定や情報共有の仕方について更なる工夫をし、業務の改善を図る。	B					
		諸帳簿の作成時期や行事や取組に係る準備期間等を含めた年間計画表を作成し、一人一人が一年間の業務内容を理解して、計画的に業務を進める。	B					
		学部全体の運営とのつながりを明確にしつつ、専門部や課程別による運営を大切にし、実務をとおして業務や実践をつなぐとともに効率的に業務を進める。	A					
地域支援会議	「丹後地域教育支援センターよさのうみ」のセンター的機能の充実とともに、地域におけるアセスメント力や支援力の向上及び、連携を大切にした乳幼児期から社会参加までの切れ目のない支援ネットワーク作りに努める。	地域の課題やニーズを把握し、困り感に寄り添い、他機関と連携した相談活動を行う中で、互いの支援力の向上をめざす（通級指導教室担当・保健師・作業療法士・地域の相談員、福祉等）。	B					<ul style="list-style-type: none"> 地域の通級指導担当者や、保健師等と連携し、計画的・継続的に相談活動を行うことで乳幼児期から社会参加まで切れ目のない支援に努めた。 継続的な相談として、ステージ間移行する前後の長期にわたって丁寧に成長の確認をしたり支援、進路、引継ぎ等について話し合ったりすることができた。 中学校では、本人への支援や保護者の本人理解を早期に始めることが重要との認識が共有され、1、2年時に相談を開始する学校が増えた。高等学校においてもニーズに応じて定期的に巡回相談するなど、特に中、高における切れ目のない支援やネットワークづくりに努めた。 自立活動専任全員が夏の教育相談に参加したり、主訴によっては巡回相談や研修支援に参加したりすることで、次世代育成にもつながった。 研修支援では、園・校以外で、丹後圏域の発達障害児等の支援者会議や医療専門職からの依頼を受けて研修を行うなど、地域の支援力向上に向けて取り組んだ。また、校内においても全校や学部の課題やニーズを把握し研修を行った。 「つなぐ」をテーマに、ステージ間移行の連携について特別支援連携協議会を開催し、講師を招き医療の視点からみる切れ目のない支援について考えることができた。また、ニーズの高まりを受けてリモートによるグループ交流を行い、関係機関が
		計画的、継続的な相談活動を通して、個人や集団の育ちを確かめ合いながら、園・校の支援力の向上をめざす。	B					
		各関係機関との連携を密にしながら、乳幼児期から社会参加までの切れ目のない継続した支援やネットワークづくりを進め、本人の実態に合った進路選択につながる支援を進める（特に中学校・高等学校）。	A	B	B			
		地域の相談支援に対応できる人材の育成に努める。	B					

						それぞれの課題やよりよい支援について交流を深め、さらなる連携の推進につながった。 ・北部のセンター共催で地域開放講座を実施した。リモート開催ということもあって本校及び地域の学校から多数の参加があり、地域の支援力向上につながった。
--	--	--	--	--	--	---

学校関係者 評価委員会 による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・12年間を見通した教育課程が適切に編制されている。 ・それぞれの学部において児童生徒の指導が丁寧になされている。 ・外部との連携を密に取っており、学校経営や教育活動の展開に生かされている。 ・地域社会とつながりあう教育実践づくりの研究が有効に行われている。
-------------------------	--

次年度に向けた改善の 方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部及び関係分掌等が連携して推進している12年間を見通した教育課程に係る取組を更に発展させる。 ・地域社会とつながりあう教育実践づくりの研究を更に充実・発展させる。
-------------------	---